

人間禅の精神

人間禅教団第一世総裁

立田 英山

（五葉会の）会則を見るとその主旨の処に人間禅の精神に則って云々という語がある。そこでわれわれは人間禅の精神とは一体どんなものであるかということ、此の際はっきり理解して置く必要があると思う。

それより先き、禅とは如何？ これを先ず把握して置かねばならぬ。禅とは禅那という印度の言葉をそのまま音訳したもので、意識すれば静慮ということになる。静かに慮る、つまり静坐工夫の謂いである。釈迦もこの禅那によって悟りを開き、われわれもこの禅那によって釈迦と同じ悟りを開きたいという希望のもとに、坐禅工夫を手段とし転迷開悟を目的とする教団を禅宗と呼んでいるのである。

その禅宗の中にも、黄檗宗あり曹洞宗ありで、各宗各派に分かれているが、それはその宗祖教祖の人生観なり世界観なりの相違から生ずるものである。つまりその人の思索の結晶であり人格の発露であり且つ又時勢の反映なりである。だからどの宗派に依るべきかはその人々の性格にもよること全く自由であらねばならぬ。よく言われる家の宗旨は天台宗だの真言宗だの禅宗だのという事は単なる習慣に過ぎない。極端に言えばどこの葬式屋さんを取引しているかを意味するだけのことで、全く宗教とは没交渉である。死骸をいじくったり骨を預かったりすることは一種の商売で宗教でもなんでもないのである。

宗教は全くその人々の選択自由であると同様に、宗教そのものも根

本の教義は不変不易であるにしても、その表現の仕方や儀式の形式や修行の容子は、時勢の推移に応じて変更しても自由であり、むしろその方が当然であると言わねばならぬ。

だから今日禅宗も時勢に即応して旧来の伝統から脱皮して、科学的民主的な新しい宗派が生まれるのは必然の結果ということが出来よう。

人間禅教団というものも、その要請に応じて生まれた処の新しい教団のひとつである。と、言っても所詮新興宗教なるものと混同されても困るが、その根本教義、その基礎宗旨は何も今更新しく唱え出されたものではない。それは釈迦の悟りそのままと毫も変わらない適々相承底の仏祖の慧命をその中核として居るわけであるが、その表現形式が現代化されたというのである。之を支持するとしないとはその人の自由であるが、私が大正年間、東京水産大学の前身である水産講習所の寺尾新博士の洋行中その代講として一年半ばかり発生学を教授したことがあると言えば凡そ私の考え方は想像がつくことと思う。私は根からの宗教家でもなく宗教で飯を喰わんとする者でもない。只高等学校の生徒時代から人生に疑いをもって、その解決の為に禅の修行と生物学の研究を選んだだけである。

こういったわけで、人間禅の精神の内容と言えば元より禅の一貫した真精神は毫も変りはないが、昔からの独善的な超世俗的な禅家流の態度を清算し、神秘的な非科学的な言辞や表現を改めている。

さて人間禅の人間という名称を冠した所以のものはどこに起因しているであろうか？

それは二つのより所があるのである。一つは仏説から一つは生物学からである。

仏教に十界というのがある。之は境涯即ち心の階級を十通りに分けたもので、言葉が古くさいから少々迷信的な匂いがするが、実は今も言ったように心の階級を表現する符徴に過ぎないのだから、言葉には

拘泥しないで戴きたい。その十界のうち人間界という一階級が設けられて居る。十界とは、下から挙げて地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、声聞、縁覚、菩薩、佛の十階級である。そして初めの六界を六道といって迷いの境涯とし、後の四界を四聖といって悟りの境涯とされて居る。だから人間界なるものは、迷いの境涯の一つに挙げられているのだから、悟りを願う禅宗からは嫌われるのはもつともである。それはそれとして判るが、その迷いの一階級の特徴がたまたま人間界ということから、人間世界そのもの、即ちわれわれが今日棲息している此の現実社会まで嫌われるということは、甚だナンセンスと言わねばならぬ。処がこのナンセンスが一般に仏教の中には何時とはなしに存在していたのである。つまり人間社会そのものを俗悪であるとか穢土えどであるとか汚れであるとか嫌い、何か超人間的な生活をするのが尊いものでもあるかの如くに思い、出家とか世外の人とかが幅をきかし専門の宗教家のような顔をしていたのである。このことは禅宗にも言えることで、黄檗宗あたりの法階の如きは到底俗人共の傍にも寄れない厳然たる御身分とされていたのである。大体宗教というものは人間の為の人間に依る宗教で、こんな人間社会から遊離してしまったものは宗教でも何でもないのである。そこでわれわれはそんな錯覚を目醒めさせてほんとうの宗教の在り方を示す為にわざわざ人間禅と銘打って出たのである。

われわれは飽くまで五欲七情完具した人間である。食欲も結構、食欲も結構、何れも生命維持の為になくはならぬ天職の本能であり、生きるものの当然の権利である。五欲七情は決して汚れでも罪でもない。ここにわれわれは出家の偽善的な教団から脱離し、人間社会から遊離した幽霊共から訣別して人間禅の旗を高く掲げたのである。苟いやしくも生物学を学んだ者なら此の意味は判るであろう。そして讚意を表するに違いないと思う。

が、しかし之は単に生物としての本能を肯定しただけのことで、そ

れだけでは何等宗教的な意義がない。宗教的な意義とは、より高次の聖なるものを基盤とした正しい楽しい仲よき処の生活である。五欲七情をむやみに汚れであるとし、やたらに罪であるとするが如きはもとよりとるに足らぬ妄想であるが、さりとして之を野放図に放置して勝手気儘に振る舞わさせてはならぬ。それでは決して正しく楽しく仲よくあり得ないのである。そして又人間なる言葉の意義を検討して見る必要がある。私は人類という言葉と人間という言葉とを区別している。人類とはホモ・サピエンスと呼ばれる、動物の一種である。進化した動物ではあるが、それだけでは人間と呼ぶことは許されない。その人類に人格を認めて初めて人間と呼ばれ得るのである。

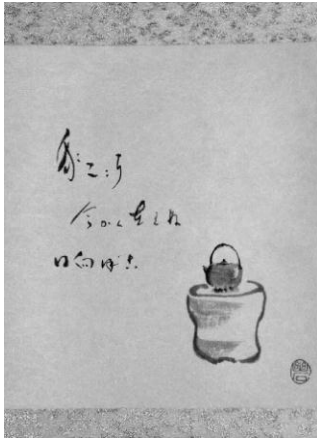
その人格を仏教では古来仏性と呼んでいる。各自に仏性を具えていることを自覚し、各自に仏性を具えていることを尊敬し合い、もっともその仏性に率って人の道を行じ人生を味って行くことを正しい楽しい仲よい生活とし之が宗教の意義とせられている。こういう生活をなし得るものを人間と呼ぶのである。だから人間という言葉は嫌われるどころか、そうした大きな矜持を感じべきである。

然りしかして禅の修行とは、此の仏性を静坐工夫によって正しく悟得し、一人でも多くの人々にこの真理を知らしめ互いに合掌し合って仲よく、更に悟後の修行によって自分の心を自分の思うように使う、即ち五欲七情を手足のように自由自在に使って人生を楽しむことである。五欲七情の奴隷となるからこれらをむやみに汚れの罪と嫌うので、これらの主人公となって自由自在に使ってみれば、初めて人生の有意義なることを悟るであろう。

以上の境涯を得た人を自覚覚他覚行円満の仏陀と称するのである。即ち十界の最高峯に仏界が据えられているのもこの為で、決して人間をはなれて佛などという特種の存在を認めているのではない。此の仏陀の境涯まで自己を大成するべく道眼を磨き道力を養うのが禅の修行の目的である。

人間禅教団には禅の修行の他に合掌運動という実際運動があるが、それは他日の事とする。

(東京水産大学校(現東京海洋大学)坐禅の会の機関誌『五葉』の創刊号(昭和27年)から。(指出純夫氏より提供))



我ここに
今かく在りぬ
日向ぼこ
(立田幽石作)

■ 著者プロフィール

立田英山 (本名／鐵二)

明治26年、東京生まれ。東京帝国大学理学部卒業。中央大学予科教授、日本医科大学教授を歴任。両忘庵釈宗活老師に参じ法を嗣ぐ。人間禅教団第一世総裁。昭和54年帰寂。庵号／耕雲庵、俳号／幽石。

